

令和4年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業(統計情報総合研究事業))
研究報告書

International Classification of Health Interventions (ICHI) の

我が国における活用・普及のための研究

研究代表者 川瀬 弘一 聖マリアンナ医科大学医学部教授

研究要旨:

WHO 国際分類ファミリー(WHO-FIC)は、その中心分類として ICD、ICF、ICHI の3つを設けている。ICHI はファイナル版が完成し 2023 年 5 月の世界保健総会(WHA)での承認を目指している。2022 年度も WHO-FIC の中間会議、年次会議に WEB で参加し、ICHI の最新情報を収集するとともに、今回整形外科領域の手術コードと ICHI のマッピングについて報告し、関節鏡下手術のコードが ICHI に不足があることを指摘した。ICHI の活用・普及については ICHI 研修会を計 4 回開催、今回は将来診療情報管理士を目指す専門学校生への研修も行い、スマホ等の通信機器を使いこなしている若い世代が ICHI online での検索をどのように感じているかを知る機会にもなり、有意義であった。また今回からアドバンスコースの研修会を設け、Extension codes に対する研修も積極的に行った。今後も ICHI 研修会の開催を継続し、ICHI が WHA で承認された際にはスピード感を持って対応できるよう準備をおこなっている。

研究分担者

岩中 督・東京大学医学部附属病院 名誉教授
波多野賢二・国立精神・神経医療研究センター 病院 医療情報室 室長
高橋長裕・公益財団法人ちば県民保健予防財団総合健診センター 顧問
小川俊夫・農学部食品栄養学科 教授
斉藤宗則・鈴鹿医療科学大学保健医療学部鍼灸サイエンス学科 教授
阿部幸喜・地域医療機能推進機構船橋中央病院 整形外科 医長
荒井康夫・北里大学病院医療支援部診療情報管理室 課長
瀬尾善宣・社会医療法人医仁会中村記念病院 副院長

国への活用・普及を検討することである。WHO 国際分類ファミリー(WHO-FIC)は、その中心分類として疾病及び関連保健問題の国際統計分類(ICD)と国際生活機能分類(ICF)、ICHI の3つを設けている。ICHI は健康と福祉に関する情報および個人や集団に提供される医療行為に関する幅広い情報をコーディングすることで、標準化された共通言語として提供しており、2023 年 5 月の世界保健総会(WHA)での承認を目指している。

研究代表者および研究分担者は、これまで厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)で、WHO-FIC の年次会議、中間会議、ICHI Task Force 会議(ICHI 会議)に出席し、最新の情報を収集するとともに、我が国の知見やフィールドテスト結果を踏まえた意見提出を図ってきた。

ICHI の我が国への活用・普及については、新しい国際統計分類であることより、海外での活用状況を踏まえて国内での活用方法を提案するとともに、医療現場への継続的な教育・

A. 研究目的

本研究の目的は、保健・医療関連行為に関する国際分類(International Classification of Health Interventions: ICHI)の開発及び我が

普及が必要である。令和 2 年度に ICHI を初めて扱う医師や医療事務の方でも理解できるよう「ICHI テキスト 2021」を作成した。令和 3 年度にはその改訂版「ICHI テキスト 2022」を作成した。ICHI は単純な分類コードではなく、ICD や ICF とともに利用可能で、さらに臨床現場や研究など様々な場面での使用も想定されており、多様な保健・医療関連行為を表現できるような体系化されている。内容は膨大で、書籍などのテキストからコード検索を行うのではなく、ウェブサイトでの活用が必須で、「ICHI online」(<https://icd.who.int/dev11/l-ichi/en>) が WHO から提供されている。このブラウザは英語で表記されており、今後我が国で利用するためには翻訳が求められている。

今年度は一昨年度に引き続き「ICHI online」を用いた ICHI 研修会を 4 か所で開催した。パソコンやスマホを用いた ICHI コードの検索方法の指導が中心である。

B. 研究方法

1) ICHI の動向

ICHI の今年度の動向について WHO-FIC 年次会議・中間会議、ICHI 会議の活動、および今後について記述する。

2) ICHI の我が国への活用方法

ICHI の教育、普及のための方法を検討する。

C. 研究結果

1) ICHI の動向

2022 年 5 月にプラハで WHO-FIC 中間会議がハイブリッド形式で開催、この中で Family Development Committee: FDC は 5 月 5 日に行われ、わが国からはコロナ禍の感染拡大の影響もあり WEB で参加した。検討内容は ICD、ICF、ICHI の中心分類間で共有されるフ

アウンダーションから各コンテンツへの改良について、具体例を示しながら検討された。たとえば ICHI で用いられている解剖学的 Extension codes は ICD と重複しており、ICD の解剖学的 Extension codes を使用し、ICHI でこれまで使われてきた解剖学的 Extension codes は削除することが合意された。

また ICHI のマッピング作業は 6 月までに完了させ、その結果レビューをもとに 7 月に ICHI の更新を行うと説明があった。またコンテンツの調整とハーモニゼーションにおいては分類全体でのコンテンツモデルの調和やネットワークを完成させるための作業計画が議論された。ICHI のファイナライズのタイムスケジュールについても順調に進んでおり、これまで ICHI の大きな修正が必要であった公衆衛生領域の見直しが完了し、最終協議が行われるとのことであった。

また 10 月 17 日から 21 日までジュネーブで WHO-FIC 年次会議がハイブリッド形式で開催、わが国からは今回も WEB 参加となった。アジアを除くほとんどの国はマスクなしの現地参加で、コロナ感染対策の違いを実感した(図 1)。代表研究者は FDC の Voting member として出席、ここでは、2022 年末までに各国からの意見をまとめ、2023 年 5 月の WHA で ICHI 承認を目指し、ICHI ファイナル版を提出

図 1. WHO-FIC 年次会議(2022 年ジュネーブにて、ハイブリッド会議の画面より)



する予定であり、ICHI の検索ツールは完全に機能するようになったと説明があった。また ICHI のコンテンツの更新として、ICHI のブラウザに3つ軸がウインドウに挿入されたこと、ICHI コーディングツールが作成されたことが説明された。また Functioning interventions のレビュー結果より新たに Stem code が追加され、現在約 9,000 の Stem code が登録されていることや、リハビリテーションの内容を把握できるための Extension codes が提案されたこと等、内容が強化されていることが説明された。ICHI 開発から 15 年かかったが、ファイナル版が完成したことが報告された。

研究分担者の阿部幸喜氏は日本整形外科学会レジストリ JOANR を用いて、我が国における整形外科領域の手術コードと ICHI のマッピングについて「Mapping the Japanese Orthopaedic Association National Registry (JOANR) to ICHI」の演題名でポスター報告を行い(図2)、これが WHO-FIC より口演発表の機会が与えられた。

本発表では、整形外科領域の国内手術コード(K コードおよびレセプトコード)の 149 コードから ICHI コードへのマッピングを試みたところ、Stem code 単独では 18.5%の相同性にとどまるが、Extension codes を用いると 43.6%、更に ICD-11 コードを付与することにより 80.5%の相同性を得たことを報告した。また、国内コードが保険請求コードを転用しているために手術コードとしては相応しくない部分があること、ICHI には関節鏡下手術のコードが不足していることなどの問題点を指摘した。両コードをマッピング、互換性を調べることは、医療行為の国際間比較を行う上で時宜を得たものであり、参加メンバーからも高い評価が得られた。

2) ICHI の我が国への活用方法

多くの医療関係者に ICHI に対する理解を深めてもらう目的で、昨年度に「ICHI テキスト 2022」を作成した(図3)。

図2. Mapping the Japanese Orthopaedic Association National Registry (JOANR) to ICHI (研究分担者の阿部幸喜氏によるポスター報告)

WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2022

17-21 October 2022

Mapping the Japanese Orthopaedic Association National Registry (JOANR) to ICHI

WHO-FIC
Poster Number
503

Abe K^{1,2}, Kawase H³, Yokogawa N⁴, Yamashita K¹, Yamashita M¹, Sasaki T¹, Yamaoka A¹, Shiga Y², Maki S², Inage K², Eguchi Y², Orita S², Ohtori S²
 1)JCHO Funabashi Central Hospital, 2)Chiba Univ., 3) St. Marianna Univ. School of Medicine, 4) Kanazawa Univ., Japan

Abstract We mapped 149 codes out of the 581 orthopedic surgical intervention codes on the Japanese Orthopaedic Association National Registry (JOANR) registration form to the ICHI using the WHO-FIC Platform (accessed on April and May 2022). Equivalent and Narrower were 27 (18.1%) and 69 (46.3%), respectively while using single stem codes alone. The rate of Equivalent rose to 120 (80.5%) with addition of other stem codes, extension codes and ICD codes.

Introduction	Domestic code (source code)	ICHI code	Level of equivalence (Relation)	Explanation
WHO has been developing ICHI since 2007, with the current version being ICHI β3. The Japanese Orthopaedic Association(JOA) launched Japan's first nationwide registry of orthopedic surgeries, the Japanese Orthopaedic Association National Registry (JOANR) in 2020. This is an ideal time to examine the relationship between domestic and international classification standards for orthopedic interventions. The JOANR database can			Equivalent	Exact match between domestic codes and ICHI code. No need to add any extension code.
			Narrower	Domestic code indicates narrower concept than ICHI code. ICHI code should be added some extension codes to adjust for domestic code.
			Broader	Domestic code means broader concept than ICHI's. Two or more ICHI codes should be combined.
			Slipped	Domestic code has both of broader and narrower implication than ICHI's. Need elaborate adjustment.
			None	Domestic code can't be expressed by ICHI codes.

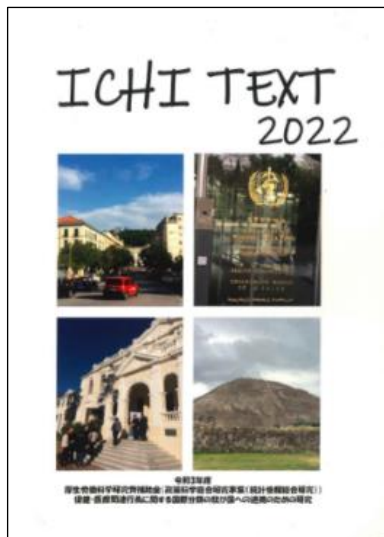
Figure 1: The relationship of mapping domestic codes to ICHI
 Modified from 'ICHI Mapping Process' paper in 2018 WHO-

Debatable issues found during mapping operation

1. We could not find appropriate ICHI codes for 22 (14.7%) domestic codes related to arthroscopic surgeries. If enough codes for arthroscopic surgeries were provided in ICHI, final rate of Equivalent could go up to 95.3%. (Example 1,2 in Table 2).

2. We found that 18 (12.1%) domestic codes involved diagnoses in their titles rather than concrete procedures. (Example 3,4 in Table 2)

図3. ICHI テキスト 2022: ICHI の基本概念
およびその構造、136 例の事例紹介の 2 部
形式、全 194 ページ、2022 年 3 月 1 日作成



これは一昨年度に作成した「ICHI テキスト 2021」の改訂版である。今回改訂版作成の大きな理由は ICHI コードを検索するブラウザが 2021 年 4 月に ICHI Platform(図4)から ICHI online(図5)に変更されたためである。

この改定版作成には、研究代表者、分担者だけでなく「ICHI テキスト 2021」の執筆者である診療情報管理士 38 名に再度執筆を依頼した。

図4. ICHI Platform
(<https://mitel.dimi.uniud.it/ichi/>)

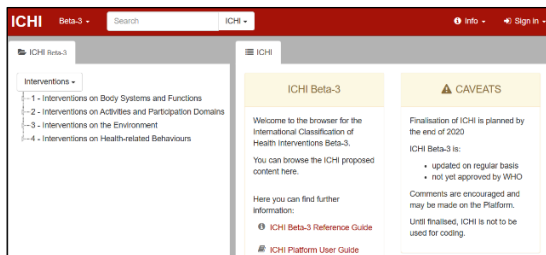
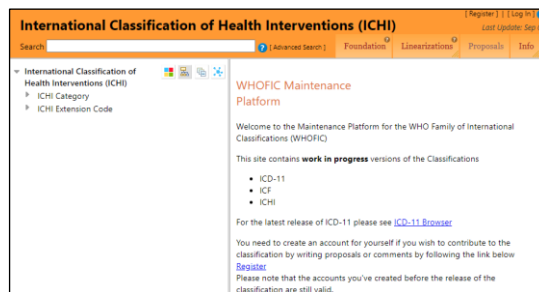


図5. ICHI online
(<https://icd.who.int/dev11/l-ichi/en>)



今年度もファイナル版完成に向けて ICHI online に掲載されている内容が大幅に変更されており、今年度中にさらなる改訂版「ICHI テキスト 2023」を完成させる予定である。

我が国での ICHI 活用にむけて、11 月 11 日に ICHI 研修会(三幸学園)を東京医療秘書福祉専門学校で開催した。これは三幸学園の協力で開催し、診療情報管理士を目指す東京医療秘書福祉専門学校の学生 65 名は現地参加で、これ以外の三幸学園関連専門学校 8 校の学生は各専門学校にて WEB で受講、WEB 参加者も含めると 531 名の学生が参加した(図6)。

図6. ICHI 研修会(三幸学園)参加専門学校
ならびに受講者数

学校名	必要部数
札幌医療秘書福祉専門学校	67
仙台医療秘書福祉専門学校	40
大宮医療秘書専門学校	45
千葉医療秘書専門学校	58
東京医療秘書福祉専門学校	65
横浜医療秘書専門学校	40
名古屋医療秘書福祉専門学校	81
大阪医療秘書福祉専門学校	71
福岡医療秘書福祉専門学校	64
合計	531

医療事務や教育に係わっている診療情報管理士への ICHI 研修会は、11 月 12 日に東京会場(TKP 東京駅カンファレンスセンター、20 名参加)、11 月 19 日に福岡会場(TKP ガーデンシティ博多新幹線口、7 名参加)、12 月 3 日に大阪会場(TKP ガーデンシティ東梅田、22 名参加)の 3カ所で開催し、49 名の参加者があった。研修内容は東京、大阪会場では初めて ICHI を知ったという方や ICHI の名前程度は聞いたことがあるという方を対象としたベーシックコース 2 時間と、Extension codes を付加したコード検索を中心としたアドバンスコース 2 時間を行い、福岡会場ではベーシックコースだけとした。指導者は研究代表者の川瀬と研究分担者の瀬尾善宣氏、日本診療情報管理学会の横堀由喜子氏と福岡医療秘書福祉専門学校副校長の本多未佐氏が担当した。どの研修会もパソコン、スマホを用いての「ICHI online」検索が中心の実習指導である。この研修会の目的は ICHI における地域の指導者を育成することでもあり、今回特にスマホを用いた検索方法、ならびにスマホや翻訳機能を ICHI online での具体的な検索法等についても指導することができた。

研修終了後にはアンケート調査を施行し、専門学校生を対象とした ICHI 研修会(三幸学園)では 322 名から回答をいただいた。WHO-FIC の中心分類であることは約 1/3 が知っていたが、残りの 2/3 の学生は「初めて ICHI を知った」と回答し、このような学生を対象に研修会をおこなった。検索にスマホを用いた学生は 3 割で、学校に設置されているパソコンを利用している方が 8 割であった。研修会の内容の難易度は「易しかった」「ちょうどよかった」が合わせて 34%で、6 割の学生は「難しかった」と回答している。しかし 2/3 の受講者は「概ね理

解できた」と回答している(図7)。

図7. ICHI 研修(三幸学園)終了後のアンケート調査結果

質問内容	ICHI研修会(三幸学園)(回答者:322名)
これまでにICHIの研修の経験は?	ある(0名:0%) ない(322名:100%)
これまでにICHIをきいたことがあるか?	初めて知った(200名:62.1%) WHO-FICの中心分類であることは知っている(115名:35.7%) よく知っている(1名:0.3%)
ICHI検索に使用した端末は?(複数回答あり)	パソコン(254名:78.9%) タブレット(1名:0.3%) スマホ(94名:29.2%)
ICHI Onlineは検索しやすいか?	検索しやすい(125名:38.8%) 検索しにくい(174名:54.0%)
和訳はどの程度必要か?	80~100%必要(217名:67.4%) 60~80%必要(54名:16.8%) 40~60%必要(24名:7.5%) 20~40%必要(8名:2.5%) 0~20%必要(4名:1.2%)
ICHI TEXT 2022は分かりやすいか?	分かりやすい(149名:46.3%) 少し分かり難い、分かり難い(144名:44.7%)
今回の研修の難易度は?	易しかった(13名:4.0%) ちょうど良かった(95名:29.5%) 難しかった(199名:61.8%)
今回の研修の理解度は?	概ね理解できた(206名:64.0%) 理解できないところがあった(91名:28.3%)

一方、現在病院医療事務等に従事している方を対象とした研修会では、東京 17 名、福岡 9 名、大阪 19 名の計 45 名からアンケートの回答をいただいた。ICHI については、「ICHI フィールドテストに参加し、よく知っている」という方が全回答者の 1/3 であったが、6 割の方は「あまり知らなかった」と回答している。検索にはスマホを用いても出来るようにと会場で伝えたため、半数近くの方は利用していた。また今回の難易度については、1 割の方が「難しかった」と回答し、理解度も 15%が「理解できないところがあった」と回答している。理解できない内容は、7 名中 5 名が Extension codes についてであった(図8)。

図8. ICHI 研修(東京、福岡、大阪)終了後のアンケート調査結果

質問内容	ICHI研修会(東京、福岡、大阪)(回答者:45名)
ベーシック、アドバンスのどちらを選択?	ベーシックだけ(12名:26.7%) アドバンスだけ(4名:8.9%) ベーシックとアドバンスの両方(29名:64.4%)
これまでにICHIの研修の経験は?	ある(33名:73.3%) ない(12名:26.7%)
これまでにICHIをきいたことがあるか?	初めて知った(3名:6.7%) WHO-FICの中心分類であることは知っている(23名:51.1%) よく知っている(4名:8.9%) ICHIフィールドテストに参加し、よく知っている(15名:33.3%)
ICHI検索に使用した端末は?(複数回答あり)	パソコン(30名:66.7%) タブレット(10名:22.2%) スマホ(20名:44.4%)
ICHI Onlineは検索しやすいか?	検索しやすい(35名:77.8%) 検索しにくい(6名:13.3%) どちらともいえない(3名:6.7%)
和訳はどの程度必要か?	80~100%必要(12名:26.7%) 60~80%必要(12名:26.7%) 40~60%必要(12名:26.7%) 20~40%必要(6名:13.3%) 0~20%必要(2名:4.4%)
ICHI TEXT 2022は分かりやすいか	分かりやすい(38名:84.4%) 少し分かり難い、分かり難い(6名:13.3%)
今回の研修の難易度は?	易しかった(1名:2.2%) ちょうど良かった(39名:86.7%) 難しかった(5名:11.1%)
今回の研修の理解度は?	概ね理解できた(38名:84.4%) 理解できないところがあった(7名:15.6%)

研修会開催以外に、2022年5月に開催された第59回日本小児外科学会学術集会にて、小児外科領域におけるICD-11という演題名で発表、2022年9月に開催された第48回日本診療情報管理学会学術大会の教育講演2で「我が国におけるICHI活用の可能性」の講演を行った。

日本語訳については、Stem codeの3つの軸、Target、Action、Meansの項目についてはこれまで仮訳を行ってきたが、頻繁にその内容が修正されるため、完全なものではできていない。今回はICHI Reference Guideの日本語訳を行った。

D. 考察

ICHI開発が2007年にスタートして、今年で16年目を迎える。2019年7月から2020年2月までに世界各国で行われたICHIフィールドテストには、日本から140名が評価者として

参加した。Public Health interventions(公衆衛生領域の保健・医療関連行為)については、標準的な言葉、用語が馴染みのない分類であり、どの国においても正解率が低率であった。このためWHO-FICでは、この数年公衆衛生領域の共通言語の開発、改善に積極的に取り組んできた。

ICHIコードはStem codeとExtension codesの組み合わせで構成されているが、Stem codeは3つの軸で表現されている。

Target(3桁コード)はActionが実行される実態で、2023年2月13日にICHI onlineで最新の内容を確認したところ、Target for body systems and functions(身体の部位や身体機能)が568コード、Target for activities and participation domains(活動や参加)が122コード、Target for the environment(環境)が107コード、Health-related Behaviours target(健康関連の行動)が35コード、Other specified, unspecified(その他、部位不明)の2コードを入れて全834コードからなっている(図9)。

図9. ICHI Target

	Target 大分類	コード数
1.	Target for body systems and functions ・Body Systems 身体の部位 ・Body Functions 身体機能、他	568
2.	Target for activities and participation domains 活動や参加 ・「学習と適用」「作業」「コミュニケーション」「セルフケア」等	122
3.	Target for the environment 環境	107
4.	Health-related Behaviours target 健康関連の行動	35
	Other specified, unspecified その他、部位不明	2
	合計	834

Action(2桁コード)はTargetに対して何を行うかを示したもので、Diagnostic(診断)が12コード、Therapeutic(治療)が78コード、Managing(管理)が12コード、Preventing(予防)が21コードで、Other specified,

unspecified(その他, 部位不明)2 コードを入れて全 125コードからなっている(図10)。

図10. ICHI Action

	Action 大分類	コード数
1.	Diagnostic 診断 ..「検査」「画像」「生検」等	12
2.	Therapeutic 治療 ..「麻酔」「切除」「切開」「挿入」「再建」 「トレーニング」「教育」「カウンセリング」等	78
3.	Managing 管理 ..「支援」「計画」等	12
4.	Preventing 予防 ..「公衆衛生監視」「感染対策」「環境改善」等	21
	Other specified, unspecified その他, 部位不明	2
	合計	125

Means(2 桁コード) は Action が実行されるプロセスと方法を示したもので、Approach(到達方法)が 13 コード、Technique(技術)が 16 コード、Method(方法)が 3 コード、Sample(サンプル)が 8 コードで、Other specified, unspecified(その他, 部位不明)の 2 コードを入れて全 42 コードからなっている(図11)。

図11. ICHI Means

	Action 大分類	コード数
1.	Approach 到達方法 ..「オープン」「経皮的」「経孔的」「鏡視下手術」等	13
2.	Technique 技術 ..「放射線(単純)」「放射線(造影)」「CT」「MRI」 「超音波」等	16
3.	Method 方法 ..「制定」「施行」「経済的手段」	3
4.	Sample 資料 ..「血液」「尿」「髄液」等	8
	Other specified, unspecified その他, 部位不明	2
	合計	42

この 3 つの軸から Health interventions の ICHI Stem code が作成され、大きく「Body systems or functions 身体の部位あるいは身体機能)」「Activities and participation domains(活動と参加)」「Environment(環境)」「Health-related Behaviours(健康関連の行動)」の 4 つのセクションに分類されている。

「Body systems or functions(身体の部位

あるいは身体機能)」には 12 の Chapters に細分化され、全 4,751 の Stem code からなる(図12)。

図12. 「Body systems or functions」の Health interventions

	Body systems or functions (身体の部位あるいは身体機能)	コード数
1.	musculoskeletal system(筋骨格系)	1,258
2.	nervous system and mental functions (神経, 精神)	446
3.	visual system(視覚系)	192
4.	ear and mastoid(耳と乳様突起)	111
5.	haematopoietic and lymphatic system (血液, リンパ系)	192
6.	endocrine system(内分泌系)	106
7.	circulatory system(循環器系)	681
8.	respiratory system and voice and speech (呼吸器系と声)	370
9.	digestive system(消化器系)	218
10.	integumentary system(外皮系)	232
11.	genitourinary system(泌尿生殖器系)	700
12.	other and unspecified(その他, 部位不明)	245
	合計	4,751

「Activities and participation domains(活動と参加)」には9つの Chapters に細分化され、全 995 の Stem code からなる(図13)。

図13. 「Activities and participation domains」の Health interventions

	Activities and participation domains (活動と参加)	コード数
13.	learning and applying knowledge (知識の学習と応用)	184
14.	general tasks and demands (一般的な作業, 課題と要求)	46
15.	communication(コミュニケーション)	123
16.	mobility(可動性, 機動力)	157
17.	self care(セルフケア)	87
18.	domestic life(家庭生活)	104
19.	interpersonal interactions and relationships (対人関係)	99
20.	major life areas(主な生活エリア)	132
21.	community, social and civic life(コミュニティ, 社会, 市民生活)	61
	other and unspecified(その他, 部位不明)	2
	合計	995

「Environment(環境)」には6つの Chapters に細分化され、全 3,198 の Stem code からなる(図14)。

図14. 「Environment」の Health interventions

Environment (環境)		コード数
22.	products and technology (製品と技術)	915
23.	the natural environment including human changes (人間の変化を含む自然環境)	670
24.	support and relationships (サポートと関係)	183
25.	attitudes (態度)	194
26.	services, systems and policies (サービス, システム, ポリシー)	640
27.	additional environmental industries and products (追加の環境産業および製品)	594
	other and unspecified (その他, 部位不明)	2
合計		3,198

「Health-related Behaviours (健康関連の行動)」には 6 つの Chapters に細分化され、全 703 の Stem code からなる(図15)。

図15. 「Health-related Behaviours」の Health interventions

Health-related Behaviours (健康関連の行動)		コード数
28.	substance-related and addictive behaviours (物質関連および中毒性のある行動)	187
29.	violence-related behaviours (暴力に関連する行動)	81
30.	safety-related behaviours (安全に関する行動)	98
31.	health service-related behaviours (安全関連の行動)	52
32.	lifestyle-related behaviours (ライフスタイル関連の行動)	252
33.	health-related behaviours (健康関連の行動)	31
	other and unspecified (その他, 部位不明)	2
合計		703

これらを合わせて、Health interventions の ICHI Stem code は 9,674 件になっている。

また Extension codes は、Stem code では十分表現できない、あるいは区別できない保健・医療関連行為を精緻化するためにとっても便利なコードであるが、付記するルールが現在決まっていないため、とても煩雑である。その内容は 8 つの大分類に分けられ、「Additional descriptive information (付加的な記述、情報)」が 58 コード、「Assistive products (支援製品)」が 138 コード、

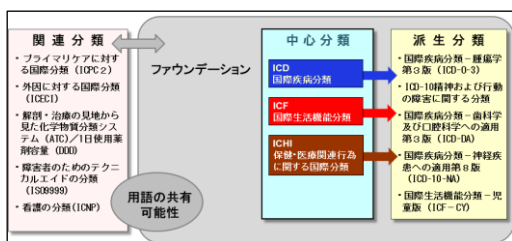
「Essential pathology tests (診断のためのテスト)」が 119 コード、「Quantifiers (数)」が 27 コード、「Telehealth (テレヘルス (遠隔医療を含む))」が 3 コード、「Therapeutic products (治療用製品)」が 169 コード、「Anatomy and topography (解剖と部位)」が 2,858 コード、「Topology Scale Value (部位スケール値)」が 40 コードの全 3,412 コードからなっている(図15)。

図15. Extension codes (2023年2月13日に ICHI online で確認)

Extension codes 大分類		コード数
1.	Additional descriptive information (付加的な記述、情報)	58
2.	Assistive products (支援製品)	138
3.	Essential pathology tests (診断のためのテスト)	119
4.	Quantifiers (数)	27
5.	Telehealth (テレヘルス (遠隔医療を含む))	3
6.	Therapeutic products (治療用製品)	169
7.	Anatomy and topography (解剖と部位)	2,858
8.	Topology Scale Value (部位スケール値)	40
合計		3,412

ICHI の Extension codes は WHO-FIC のファウンデーションという共通のストックから引き出すことが 2022 年の WHO-FIC 年次会議で確認され(図13)、これにより ICD と ICHI の Extension codes の共通化が急ピッチで進められている。しかしながら 2023 年 2 月 13 日現在 ICHI online で検索しても「No Code Assigned (コードが割り当てられていません)」と表示され、まだ具体的なコードは振られていない。

図13. WHO 国際統計分類ファミリー WHO-FIC: 中心分類である ICD、ICF、ICHI や派生分類は WHO-FIC のファウンデーションという共通の枠組みから用語が引き出されている



Final 版完成に向けて急ピッチで ICHI の整備が行われているため、その内容は 1 年前と比べて項目、内容ともは毎年大幅に修正されている。特に検索ブラウザが ICHI online に変更されており、一昨年度に作成した「ICHI テキスト 2021」を大幅に改訂した「ICHI テキスト 2022」を 2022 年 3 月に作成した。

ICHI 活用にむけて、このテキストを用いた講習会を今年度も開催、新型コロナウイルスが一時的に収束していた時期に4か所で対面開催することができた。パソコン、タブレット、スマホで ICHI online のブラウザを開き、具体的な術式名や検査法の ICHI コードを検索し、体験していただいた。正しく検索できない場合には、指導者が付き添い実習指導をおこなった。昨年度と大きく変更したことは、検索をスマホでも体験していただいた点と、電子機器の翻訳機能を用いて英語に不慣れな方でも検索できる指導を行った点である。現在 ICHI の日本語への翻訳作業は中断している。これは Final 版完成に向けて、ICHI の内容が大幅に修正されているためで、確定後は速やかに翻訳をおこない、ICHI online のブラウザでも日本語での検索ができるようにしていく予定である。現時点では Google 等の翻訳機能を用いるこ

とで、十分に検索可能なことが講習で明らかになった。

今回の専門学校生への講習の目的は、全く ICHI を知らなくても ICHI を理解できるか、スマホなどの電子機器を用いることに習熟している若い世代が翻訳機能を用いて ICHI 検索が可能かを確認することであった。結果、6割の学生は今回の研修は難しかったと回答しているが、初めて開いた ICHI online が 4 割近く「検索しやすい」と回答し、2/3 の学生が「概ね理解できた」と回答したことは、電子機器の利用が生活の一部になっている若い世代においては、それほど困難でなかったことを示している。

病院の医療事務職や診療情報管理士への ICHI 研修会は、昨年度の四国研修会、北海道研修会に引き続き、東京、大阪、福岡の 3カ所で開催した。研修会に繰り返し参加する方もいるため、今年度から新たにアドバンスコースを設け、Extension codes を付加したコード検索を中心とした研修内容を準備した。ベーシックコースも含めて、研究分担者の瀬尾善宣氏の専門分野である脳神経外科領域から頭部 CT 検査、聴力検査、脳室-腹腔シヤント術 (VP シヤント)、頭蓋内動脈の血栓融解療法などの問題を新たに取り入れた。

こちらの研修会終了後のアンケート調査結果から、これまでに ICHI 研修参加された方が 3/4、さらには ICHI フィールドテストに参加した方も 1/3 と、既に ICHI にふれてきた方が多く、研修の難易度は 87%の方が「ちょうど良かった」と回答し、「易しかった」が 2%、「難しかった」が 11%だった。研修の理解度も「理解できた」84%だったが、「理解できないところがあった」と回答した 16%のほとんどは、Extension codes に関する内容だった。今回

アドバンスコースを新たに取りが入れたことは受講者の要望に合った研修だったと感じている。「和訳はどの程度必要か？」の回答では、学生ほど高くはなかったものの、60%以上必要と考えている方が53%であり、Final版完成後には日本語訳の作業をできるだけ早急に行うことが、我が国での ICHI 活用に重要であることが確認できた。

E. 結論

2023年5月のWHAにおいてICHIの承認が期待される。承認後のICHIの我が国への活用については、今後も多くの方にICHIを理解していただくために、「ICHIテキスト」を用いた講習会を継続し、これまでの経験を踏まえて、ベーシック、アドバンスコースの内容をブラッシュアップしていく予定である。そのために教育・普及のための教材の基本となる「ICHIテキスト」の改訂も毎年行いたいと考えている。今後の課題は、ICHIの日本語訳の作業であり、スピード感を持って対処したい。さらにこれと並行して、ICHIのDPC/PDPSにおける国内利用の具体案も検討したい。

F. 健康危険情報

特記事項なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1) K. Abe, H. Kawase, N. Yokogawa, K. Yamashita, M. Yamashita, T. Sasaki, A. Yamaoka, Y. Shiga, S. Maki, K. Inage, Y. Eguchi, S. Orita, S. Ohtori. Mapping the Japanese orthopedic association national registry (JOANR) to the international classification of health interventions (ICHI),

Journal of Orthopaedic Science, 2023.

<https://doi.org/10.1016/j.jos.2023.01.002>

2) 川瀬弘一. 保健・医療関連行為に関する国際分類(ICHI)の動向. 医学のあゆみ. 2022; 283(8): 803-804..

3) 松本万夫, 稲垣時子, 河村保孝, 瀬尾善宣, 住友正幸, 海野博資, 川瀬弘一. シンポジウム2: ICD-11 の実際. 日本診療情報管理学会誌. 2022; 34(2): 13-39..

2. 学会発表

1) 川瀬弘一, 岩中 督, 波多野賢二. 小児外科領域におけるICD-11. 第59回日本小児外科学会学術集会. 東京. 2022/5

2) 川瀬弘一. 教育講演2 我が国におけるICHI活用の可能性 第48回日本診療情報管理学会学術大会. 高知. 2022/7

3) K. Abe, H. Kawase, N. Yokogawa, K. Yamashita, M. Yamashita, T. Sasaki, A. Yamaoka, Y. Shiga, S. Maki, K. Inage, Y. Eguchi, S. Orita, S. Ohtori. Mapping the Japanese orthopedic association national registry (JOANR) to ICHI, WHO Family of International Classifications Network Annual Meeting 2022, 2022/10

4) 阿部幸喜, 山下正臣, 稲毛一秀, 山下桂志, 佐々木俊秀, 山岡昭義, 折田純久, 江口和, 牧 聡, 志賀康浩, 大鳥精司. ICHI (International Classification of Health Interventions)を介したJOANR-DBの国際間比較への利活用の可能性. 第95回日本整形外科学会学術総会. 神戸. 2022/5

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
特記事項なし

2. 実用新案登録
特記事項なし

3. その他
特記事項なし